

## 自由集会-6

「人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐる」

企画責任者：河合香吏（東京外大・AA研）

話題提供者：松田一希（中部大・中部高等学術研）、杉山祐子（弘前大・人文社会）、寺嶋秀明（神戸学院大・人文）、中川尚史（京都大・理）

コメンテーター：本郷峻（京都大・理）、内堀基光（放送大・教養）

内容：

### 1. 趣旨と概要（河合香吏）

本自由集会は、人類の社会性 **Sociality** の進化をめぐる霊長類学と人類学の共同研究に基づいて企画された。社会性とは、他者/他個体と同所的に存在する能力、集団の中で複数個体の共存を保障する、いわば「他者とともに生きる」方途を指す。重層社会はそうした方途のひとつのあらわれである。集会では、人類社会に普遍的な家族という最小単位集団の起原や生成過程を探るとともに、家族同士を結びつける、より上部の構造をもつ重層社会が形成される機序について、進化的な視点から接近することを目指した。

家族の起原については、今西錦司による人間家族の成立する4条件として、(1) インセストの禁忌、(2) エクソガミー、(3) コミュニティ、(4) 配偶者間の性による分業、が知られている（『民族学研究』Vol.25 No.3, 1961）。この中で、家族という排他的な最小集団とそれらの共存を許すコミュニティの重層関係について、今西は家族的な集団（ファミロイド）が集まってコミュニティを形成したと考えたのに対し、伊谷純一郎や西田利貞は複雄複雌の大集団の内部に家族的な小集団が析出したとする仮説を提唱した。最近では山極寿一が危険で食料の乏しいニッチにおける協同育児の要請が重層社会を生んだ可能性を指摘している。

初期人類はどのような集団を形成しており、家族とコミュニティの重層性はいかに生成したのか。それはどのような能力や傾向の獲得と関連していたのか。生息環境とはどのような関係にあったのか。現代に生きる人々の社会の重層性はいかなるものか。これらの諸問題を巡り、霊長類学と人類学から各二人の話題提供、二人のコメンテーターからのコメントにつづき、フロアを交えた全体討論をおこなった。

## 2. 話題提供

### 2-1 「コロブス類の重層社会—ヒヒ類と比較して」 (松田一希)

ヒト以外の霊長類（以下、単に「霊長類」とする）の重層社会については、古くからヒヒ類の研究が知られてきたが、近年、オナガザル科コロブス類の社会にも重層性が認められることが分かってきた。ここでいう重層性とは、基本的にハーレム型のコアユニット（最小の集まり）が離合集散を繰り返すことであり、チンパンジーやクモザルのような単層の群れ内において個体同士が離合集散することとは異なる。この現象は系統的にヒトに近い現生の野生大型類人猿にはみられず、ヒヒ類とコロブス類にのみ認められる。松田はヒヒ類の研究成果に加え、自身の研究を中心にコロブス類に関する新知見を紹介した。

松田の調査対象であるテングザル社会では日中はハーレム型コアユニット間の親和的な関係が観察されにくい、夕刻には複数のコアユニットが川沿いの木々（泊まり場）に集まって眠るという重層性を示す。特に川幅の狭いところの木々に、より多くのコアユニットが集まる。これは森側から迫り来る捕食者や水中に潜む捕食者に対し、川を渡って対岸へ安全に逃げるための戦略である。つまり、対捕食者戦略が社会の重層化が生じた重要な一因であると松田は主張した。また餌資源も、テングザル社会の形成に重要な影響を及ぼしている。餌資源のなかでも、森を優先している植物種が一斉に花をつける時期に、より多くのコアユニットが川沿いに集まった。これは、サルの好む季節性の強い食物資源が急激に増加したことで、複数のコアユニットどうしが激しい競争をすることなく、同じ場所に集まることができたと解釈できる。つまり、ヒヒ類の社会の重層化と同様、テングザル社会の複雑化には、捕食圧と餌資源量という環境要因が重要であることが示された。さらに松田は、毛づくろいなどコアユニット内の社会交渉のありかたや、コアユニットからの雌雄の移籍パターンをヒヒ類とコロブス類の複数の種間で比較・検討した。その結果、重層化する社会を形成する種のコアユニットの内部構造は多様であり、一貫した特質が見いだせなかった。そこで改めて、環境要因こそが社会の重層化を促進した、重要なカギであると結論した。また、これまでの研究ではコアユニットはすべてハーレム型であるという共通点があるが、現在研究の進められているアフリカのアンゴラコロブスなどが複雄複雌のコアユニットによる重層社会を形成している可能性に触れ、ヒト社会の重層化のモデルとなり得ることに期待を寄せた。

## 2-2 「姉妹になるか母になるか—焼畑農耕民の離合集散と社会の重層化を考える」 (杉山祐子)

杉山はザンビアのミオンボ林（乾燥疎開林）帯に住むバントゥ系焼畑農耕民ベンバの社会を対象に研究を続けてきた生態人類学者である。ベンバの村は母系親族を核に構成されるが、30年程度で分裂し、離合集散を繰り返す。一方、社会全体としては、個々の世帯が村へ、村がジュニアチーフ領へ、さらにパラマウントチーフのいるベンバ王国へと重層化されており、百万人規模の成員が「われらベンバ」というアイデンティティを共有する王国を構成している。杉山は、ベンバ社会の離合集散性と重層化のしくみについて、以下のように紹介した。

村における生計活動の単位は世帯だが、消費と育児を含む再生産活動は世帯の垣根をこえ、世代・出自の異なる女性の集まりとその共同によって担われる。世帯が村へと重層化する過程は、①生産の局面での男女の共同（世帯）と、②消費の局面での女性の共同（炉帯グループ）が少しずつずれながら重なることで実質化されている。

妻方居住制をとるベンバでは、結婚に伴って男性が出身村を出て行く。しかし村長の地位は母方オジから継承されるので、継承者の男性は母の村にとどまる。このように、居住の原則では別の集団になるべき男性たちが、同じ居住集団を構成するベンバの村は、構造的な裂け目をそもそも内包しているといっぴよい。その裂け目が顕在化するの（村長の）世代交代期である。この時期には、村長の地位をめぐる異世代男性間の葛藤が高まるが、このとき「おばあさん」とよばれる年長女性の動向が村の存続・分裂を方向づける。年長女性が現村長の「姉妹」でなく次世代の男性の「母」であることを選ぶとき、彼女を結節点とする母系のつながりの通時性（系）が強調されて彼女を結節点とする母系親族集団が顕在化し、「系」の生成が、すでに現存しない祖先を含む系譜の認知につながる。

ベンバは村内の階層分化や組織の複雑化を伴わずに村が王国へとまとめあげられるが、このレベルの重層化には「系譜」が要となる。それぞれのベンバ個人は歴代ベンバ王の祖霊を身の内にもつとされ、それを通してベンバ王の系譜につながっている。実際の血縁による系譜の認知をベンバ王の系譜と併用することによって祖霊は村長の権力の後ろだてとなり、世代交代によって新たに村

長となる男性は、祖霊の庇護を得るノウハウを先代村長から継承するため、一度分裂した母系の親族がふたたび集まる契機ともなる。

世帯から村への重層化には単位の異なる共同の実践的な重なり合いが重要だが、村をさらに大きな集団へと重層化するしくみには「系」の生成を基礎とする系譜と、それを実際の血縁を超えた範囲にまで応用する表象能力が重要な役割をはたしている。

2-3「ヒトは誰と一緒にいたいのかー狩猟採集民の生態と社会から考える」(寺嶋秀明)

寺嶋はイトウリの森(旧ザイール)をはじめ、ピグミー系狩猟採集民の社会で調査研究を続けてきた生態人類学者であり、狩猟採集民の居住集団であるバンドと家族といった集団の現実の集まり方について、以下のように紹介した。

人類社会の原初的姿を探るために、現生狩猟採集社会とヒト以外の霊長類社会のあり方は大きなヒントになる。ただし、ヒトとチンパンジー類との共通祖先の時代から現在までおおよそ700万年もの時間がたっていることを考えるならば、方法論的にも十分な慎重さが必要である。家族がいつ頃から登場したのかは、ヒト社会の進化を考える上で重要な問題であるが、古人類学的には確たる証拠がほとんどなく、その年代についての真相は不明である。重層社会という切り口はたいへん興味深いのが、表面的な議論に終わらせないためにも、「家族」「群れ／バンド」「父系／母系」などのテクニカルタームにどのような意味をもたせるのか、霊長類学と人類学の双方から大いに議論される必要があるだろう。

イトウリにおけるバンドは、5～15家族、10～40人程度がともに遊動生活をする重層的な集団である。バンドのメンバーは狩猟、採集、漁撈等の生業活動にともに従事し、動物の肉をはじめ、獲得されたものは全体で分かち合うことが大きな特徴である。また、子育てや娯楽などもシェアの対象となる。狩猟採集民のバンド構造については古くから議論されてきたが、次の二つに大別できる。すなわち、①父系出自、父方居住といった固定的なルールに則り、結果的に男性親族がバンド内の強固な核となって、テリトリーを防衛する「社会学的モデル」(バンド中心主義)と、②非単系(双系)的に系譜関係が辿られ、集団の輪郭は流動性が高く、テリトリーはあったとしても開放的な「フレキシブルモデル」の二つである。前者の代表はオーストラリア原住民社会であり、後者の代表はブッシュマン社会である。ブッシュマンでは恒久的な集団は家族のみであり、バンドではなくキャンプと呼ぶべきであるとすらいわれた。しかし、これら二つのモデルのいずれも現実世界からはへだたりがある。

イトウリのバンドについても、かつては父系バンド、もしくは父方居住バンドと呼ばれてきたが、実際にどこに住むかは、ルールによって自動的に決まるのではなく、人と人のつながりをもとに、その時々で状況で選択されるものであり、家族はバンドを超えて離合集散することがわかってきた。誰と住むかの決め手は「心地よさ」であるといってもよく、たとえば出産、育児にたずさわる女性にとっては自分の母や姉妹とともに暮らし、彼女たちから援助を受けられることは心強い。男性においても、妻方の親族と一緒に暮らすことによって自分のパーソナルなネットワークを広げ、将来的なメリットを望むこともできる。父系のメールボンドが狩猟行動に必ずしもプラスにならないといった指摘もある。

さらに、狩猟採集民の現実の居住集団は家族とバンドというレベルでの重層性に加え、個別のバンドより一段階上の大きな構造の中にあることを理解する必要がある。バンドを越えた人々のネットワークである。個人や家族はその大きな構造の中で、自らの決断において居住集団を変えうるという流動性をもつ。人々は実際に居住しているバンドやバンド同士の近隣集団という「今この集団」に属しながらも、それらを超えて空間的・時間的に遠く隔たりながらもソーシャルな絆によってつながる「はるかな集団」の中に自らの居場所を見出しているのである。

ヒト社会に特有の価値として、①平等、②寛容、③共有、④自立がある。また行動の特性として、①集団の流動性、②関係の多重性、③個人の多面性、④歴史の蓄積性がある。重層社会の特性の解明に向けた霊長類と人類学の共同作業を深めるには、これらの価値や行動特性がヒト以外の霊長類ではどのように存在しているか確かめる必要がある。母系/父系、一夫多妻/単婚など単に外見的なラベルの類似を超えてさらに一步深めたレベルでの検討が重要であろう。

#### 2-4「初期人類の重層社会についての新説—霊長類学の立場から」(中川尚史)

中川は「霊長類における集団の機能と進化」(2009、河合香吏編『集団』)において、初期人類が単雄単雌群を、『“ふつう”のサルが語るヒトの起源と進化』(2015)においては、その集合体としての重層社会を形成していたとした。本発表では初期人類の重層性について、以下のように、さらに発展的に考察した。

初期人類の社会を考える際、第一に問題となるのは、ヒトと近縁の現生類人猿の社会がチンパンジーの複雄複雌型、ゴリラの単雄複雌型、オランウータンの単独型、テナガザルの単雄単雌型と極めて多様である点にある。中川はこれ

まで分析に用いられてきた社会的分散ではなく、地理的分散（出生地から雌雄のどちらがより遠くに分散するのか）に着目した。その結果、霊長類社会の祖型（単独社会）はオス偏向分散だが、真猿類段階でメス偏向分散に移行し、それがヒト上科の祖型となって初期人類まで引き継がれた可能性を導きだした。加えて、メス偏向分散と単雄単雌という社会的形質が連動して進化することを勘案し、単雄単雌社会の形成以来、初期人類までその傾向が続いてきたと考えた。近年の化石人類学の成果からも、初期人類の性的二型は小さく、一夫一妻であった可能性があるといった、この仮説を支持する証拠が出ている。

このように、中川はヒト上科の祖先段階で単雄単雌群が形成されていたと考えており、ヒトとチンパンジーの共通祖先（LCA）の段階で重層化し、メス偏向分散で、オスは近くに分散するが、その際、オスは上位の構造の中にとどまるように移行していったと考える。

LCAの重層化への淘汰圧としては、生息環境の乾燥化による捕食圧の増加と食物の分散化による離散性の必要性が挙げられる。一方、初期人類のメスは排卵の隠蔽と常時性交渉を受け入れる性質とを獲得し、これによりオスからの食物分配が進行した。さらに直立二足歩行により運搬が開始され、女性のみならず子どもへの食物分配も進み、それが子どもの生存率を上げ、また女性の出産間隔の短縮にもつながって、ひとりの女性に固執しつつも、男性の繁殖成功度を上げる結果となった。

ヒトの重層社会の特徴は父系の家族が婚姻関係で結びつく点にあり、男性は自分の血縁者だけでなく配偶者の血縁者（姻戚）とも同じバンドを形成する。人類だけにみられるこの特徴は初期人類段階ではまだなかったと中川は考えており、男性による大規模な集団狩猟の開始など、より大きな協力が必要になった段階で獲得されたとする。また、いわゆる「おばあさん仮説（閉経後の祖母が孫の世話をする）」についても、姻戚を含めたバンド形成は、父方のみならず、母方祖母による孫の世話も得られ、母親の育児負担がさらに軽減され、出産間隔のさらなる短縮につながった、と考えられる。

### 3. コメント

#### 3-1 コメント1（本郷峻）

本郷氏は、300～800頭からなる集団を作るマンドリルの行動生態学を専門とする霊長類学者である。かつてはマンドリルの社会に重層性があると指摘され

ていたが、氏の研究によって、集団内個体の空間配置パターンには重層社会種との類似性はないことが明らかになり、重層社会ではないとの結論が導き出されている。

一方で氏は、霊長類社会の重層性を理解するためには空間配置だけでは不十分だと考えている。霊長類の社会には3つの要素があるといわれる。すなわち、①社会組織（群れにいる個体の構成）、②繁殖システム（一夫一妻、一夫多妻など交尾による個体間関係）、③社会構造（交尾以外の個体間関係）である。重層社会においては、③の社会構造に関して機能や社会関係の質が異なる複数の集団が入れ子状になっている点が重要である。まず最小の集団として繁殖集団（マントヒヒのワンメールユニット(OMU)やヒトの家族など、排他的な繁殖行動が行われる単位）があり、その外側に認知集団（自他を個体識別し、順位や親密度など互いの社会関係を認知している個体の集まり）があり、さらにその上に生態集団（社会関係の認知はなく、生態的な必要性に基づいて、同種であるために排他的行動をしない個体の集まり）がある。単層社会では、これら3つのレベルの集団の輪郭が一致しているが、重層社会においては、マントヒヒを例にとると OMU という繁殖集団、Clan あるいは Band という認知集団、さらに上位に Troop という生態集団があり、それらが入れ子状になって存在する。そして、一般にヒトを含む霊長類の社会の単位は認知集団と考えるべきである、と氏は主張する。以上に基づいて、各話題提供者に以下のようにコメントした。

松田の紹介したテングザルは、OMU が認知集団であり、捕食者対策として川沿いの泊まり場に集まる上位の集まりは生態集団である可能性が否定できない。テングザル社会の重層性を明らかにするには、泊まり場の集団のメンバーシップや社会行動を調査する必要がある。

杉山や寺嶋の紹介したヒト社会においては、バンドや村が認知集団であり、これらを単位として生活のほとんどが営まれているため、バンドや村が生態集団でもあると考える。一方、ヒトの重層社会が他の霊長類のそれとは異なる点として、認知集団が生態集団を超越している可能性を指摘できる。「われらベンバ」や「はるかな集団」は、実際に生活を共にしない個体を含む集まりであるにもかかわらず、何らかのアイデンティティを共有しており、それは霊長類の認知集団とは異なるのではないか。

中川の社会進化仮説に対しては、中川と同じアプローチ（類人猿以外の現生霊長類の社会組織から社会進化を推定）に立脚しながらも、全く異なる結論に

至っている論文(Shultz ら 2011)を紹介した。すなわち、霊長類は原猿類のような単独性から、真猿類においてまとまりのゆるやかな複雄複雌群を社会の単位として獲得し、そこから単雄複雌群やペアが進化した、また、一度社会がペア型になってしまうと再び複雄複雌群には戻りにくい、というものである。これは、真猿類の祖先は雌偏向分散の単雄単雌群であり、ペアから重層性を持つ複雄複雌群が成立したとする中川説とは大きく異なる。

このような矛盾を生み出す要因として、同種内の社会組織の多様性がある。多くの霊長類では種が同じでも地域によって群れのサイズだけでなく、たとえば単雄か複雄かといった社会組織のタイプが異なることが広く知られている。ヒトの社会においても、家族がペア型か一雄複雌型か、地域間でも地域内でも多様性がある。そのため、各霊長類種の社会組織を種ごとにどれか一つに固定する方法では社会進化の推定に限界がある。さらに言えば、人類の祖先の社会が重層か単層か、家族の起源がペアか一雄複雌か、どちらかしかなかったと考えること自体がナンセンスなのかもしれない。

### 3-2 コメント2 (内堀基光)

内堀氏はボルネオの焼畑農耕民を研究してきた社会文化人類学者であり、社会の重層性というものを考えるときにも、もっぱら人間の方から考える。そうした場合、人間社会の研究に関して重層性というのは当たり前すぎてまったく面白くないと言う。寺嶋のまとめた類型は基本的に前提としてあり、その前提のもとで、たとえば寺嶋の「はるかな集団」は、実際われわれの生きている社会では、国家であり、あるいは全人類であるという発想にもなろうと指摘する。だが、その一方で、氏は、むしろその逆の方向、すなわち人間の本質的孤独の可能性に着目する。人間は集団的、群居的な存在で、その意味では社会的な存在であるが、今の人間をみるのにいちばんだいじなのは、人間が孤独になれるということであると主張する。いろいろな社会的軋轢から逃げると言うこと——それは寺嶋も言及していることだが——とは別に、一定の限度つきではあるが、人は一人で生きていける能力をもっている。そういう一人で生きていける生態条件、社会条件が、進化上いつから可能になったのかを問いたくなる言うのである。人の社会の重層性を考えるということは、そうした単独者(個)から国家へいたる広範で多様な諸階梯(レベル)の中で考えるということなのである。



氏はまた、具体的な人間社会のことを考える場合、人間関係はけっきょくは幻想のあり方の問題だということを出発点にしたいとも言う。その基底には配偶幻想なるものがある。つまり、繁殖の相手に対してさまざまな幻想をもって生きていくのが現生人類であって、それが家族的単位というまとまりに直接結びついているかのような幻想にもなり、さらにそれが集まった共住共同体、共住共同体の連携としての通婚圏（中川の触れた姻戚関係）の広がり、さらに歴史的には言語文化共同体としてのエトノスの問題、またさらに、近現代においてはエトノスを政治的国家に結びつける形でネーションステイトが現出している、といった幻想の拡大をイメージすることができる。そして、いろいろな試みはあるにしても、われわれはまだ大きくネーションステイトのくびきの中にある。氏が最後に指摘したのは、上記にしたがえば、本集会の議論には適さないが、人間の重層性のあり方、今のわれわれのあり方を考えるには、ネーションステイトの問題を考えるのが有効であることになってしまうのだ、ということであった。

#### 4. 討論

はじめにコメンテーターのコメントに対し、話題提供者から応答がなされた。

松田は、テングザルが川沿いの木々に集まる際、生態的なプレッシャーで集まっているのかもしれないが、一本の木に別々のユニットが何の軋轢もなく泊まれるということは不自然である（ニホンザルなどではあり得ない）ため、やはりただ単に同種だから集まっているだけではない、すなわち重層社会をもっているという立場に現在では立っている、と声明した。

寺嶋は、狩猟採集民においては生態学でいう「生態集団」は想定できないとし、自分とまったく無関係な無数の人間がただ居るという状況はあり得ないとした。また、「はるかな集団」はある種の認知をもとにした集団であり、歴史や記憶や象徴性などに裏打ちされたイメージの世界であるが、ただ、具体的な集団とこの「はるかな集団」とは、人間が動くことによっていずれにも移行可能なのであり、相互に関連した形で二つの世界があるのだと主張した。

杉山もまた、ベンバにおける「祖霊の系譜」はイメージの上でのものだが、それはごく日常的な社会関係（友人関係や親族関係など）のリアリティがあっ

てこそ成立しているものであり、われわれの抱く「国家」や「同胞」などとは

異質なものとして位置づけられること、その点こそが人類社会の重層性を考える上で重要であると付言した。

その後、フロアを交えてコメント、質疑応答がなされた。一部、紹介する。

まず、話題提供者の間で「重層社会」という概念についての了解があったのかとの疑義が出された。具体的には、空間分布における階層性の話と帰属についての話がかみ合わないまま両方提示されているということ、そして、サルの研究とヒトの研究をつなげていくためには、帰属意識が分布にどう影響を与えるのか、あるいは逆に分布様式がどういう帰属意識を作っていくのかといった問題について、「重層性」という同じ言葉で語られている異なる概念を整理して考えていく必要があるとの指摘である。極めて本質的な問題の指摘として重く受け止め、今後の検討課題としたいと思う。

また、松田が紹介したようにヒト以外の霊長類にみられる重層社会は「泊まり場」が基本となることが多いようだが、それと「(ヒトの)定住」すなわち、一定の場所で眠るという問題はどのようにつながるのかとの質問が出された。つまり、定住するようになったときに、霊長類の泊まり場のように「ここがふさわしい」という場所があると比較的重層化しやすいといったシナリオが成り立つのかどうかという疑問である。これに対しては、いつネストを作らなくなったのかということと、その際に夜をどこで過ごすようになったのかを関連づけて考えられるであろうこと、そして、初期人類では特定の洞窟などにユニットが集まって眠るようになり(対捕食者戦略でもある)、重層化の要因になった可能性を示唆した。また、人類史において、定住化は農耕の開始を最終段階として現れ、それは重層化の大きなきっかけとなったが、狩猟採集段階でも(北西海岸インディアンなど)定住化し、複雑な階層社会を作った例もあることが示された。

さらに、霊長類における重層社会の淘汰圧に関しては松田が紹介したが、それが狩猟採集民にも当てはまるのかといった質問が出た。具体的には、霊長類の重層性は、捕食圧によって集合しつつ、餌の分布次第で小集団に分散するというように生態要因で説明され得るが、狩猟採集民では社会的要因による離合集散が強調されていた点への疑問である。これに対しては、狩猟採集民においても環境条件に応じて集団のあり方を変えるということはあるし、季節によっても形態は変わるが、変化のしかたは往々にして繰り返されるとの説明があり、ただ、そうした自然対応的な変化を織りこんだ形で生活がイメージされている

ものの、その上にあるより高次の社会の形は大きく変わるものではないことが示された。

その他、「(本郷氏のいう) 認知」をキーワードに、例えばイワシの群れ(生態集団、個体の認知がない、同種であるというだけの集まり)とは異なり、霊長類は認知集団を作ってしまったが、その上でいっしょにいられるということが実はたいへんな事態であると認識すべきである、言い換えれば、いちど個体を認知した集団を作った者が、ただ単に同種だからいっしょにいるというだけではない、個体同士がさまざまなレベルの濃淡をつけながら「ともにいる」ことができるのが重層社会の重要な点であり、それはひいては混群といった現象を理解する際にも同じ「社会」なるものの成り立ちとして関連づけて語れるかもしれない、等の意見が出された。

(文責：河合香吏)